

ミステリ読書案内

2021. 3. 8 発行元

第211号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

E・D・ホックの代表作

「短編の名手」と呼ばれるエドワード・D・ホック。1970年代には日本でも海外でも多くのミステリ雑誌に作品が掲載されていた。彼の作品の中から代表作と呼べる本を3冊選んで紹介することにした。

数多くのシリーズもの

ホックは1930年生まれ。EQ MM=エラリー・クイーンズ・ミステリ・マガジンなどの常連作家として短編ミステリを数多く発表してきた。短編の名手として知られ、800編以上の作品が残されている。『長方形の部屋』がMWA最優秀短編賞を受賞している。

数多くの主人公を生み出し、シリーズものとして活躍させてきた。基本は本格謎解き仕立てのパズラーであり、玄人好みの構成の作品が

多い。長編は多くなく、短編集は日本で独自に編集したものが10冊程度出ている。代表作としてどれを取り上げようかと悩んだが、種類の違うものを選びようという観点で『怪盗ニック』と『コンピューター検察局』と『大鴉』にしてみた。私が持っているのはいずれもハヤカワ・ポケットミステリ。現在はハヤカワ・ミステリ文庫の方に収められているはずだ。そうは言っても今時は手に入りにくい本になっているのではないだろうか。海外の中堅どころの作品の現状は…。

No. 3 「大鴉殺人事件」

ハヤカワ・ポケット・ミステリの1186番。ホックの長編としては最初の作品になる。1969年の作。内容はMWA賞の授賞式会場で起きる殺人事件。受賞者のロス・クレグソンがマイクで挨拶を述べ始めたときに弾丸が発射され、受賞者が倒れる。わずかに残った意識の中で、正賞の「大鴉像」を床に打ち付けて破壊した。これが重要なダイイング・メッセージとなっていく。

ホック自身の受賞時の経験を生かし、エラリー・クイーンをはじめ、たくさんの実在ミステリ作家や編集者などがそのまま実名で登場するという珍しい趣向の内容。それだけに読者は引き付けられ、楽しんで読むことができる。

No. 1 「怪盗ニック登場」

ハヤカワ・ポケット・ミステリの1256番。ホックと言えど何と言っても中心になる主人公は「怪盗ニック・ヴェルヴェット」。イタリア系移民の子として生まれ、朝鮮戦争に出征した後、いろんな職業につく。しかし、一番効率がよいのは「泥棒稼業」だと気づく。でも、どこにでもいる普通の泥棒ではない。現金や宝石などの価値のあるものは盗まない。通常は価値がないだろうと思われるものの専門に依頼を受け付けて、高額報酬で盗む。そこが頭の使いどころで、泥棒でありながら知的な探偵として依頼の裏に潜むものまでも明らかにしていくのがポイントになる。

日本版として何冊か出版されているが、最初の短編集となった『怪盗ニック登場』には『斑の虎』『真鍮の文字』『大リーグ盗難事件』『カレンダー盗難事件』『青い回転木馬』など12編が収録されている。題名になっているのが盗む対象である。「それはいったいどうやって盗むのだ?」と思うようなものもある。ニックはたいてい単独で行動する。独身でハンサム。でも恋人は決まっている。

ポケミス1298番に入っている『ホックと13人の仲間たち』という短編集の巻頭にもニックは登場する。この時は湖に棲む怪獣を盗むことになる。この本にはニック以外のさまざまなシリーズ・キャラクターも登場。オカルト探偵、西部探偵、博士、神父、詐欺師、レオポルド警部…。楽しめる一冊。

No. 2 「コンピューター検察局」

ハヤカワ・ポケット・ミステリの1227番。1971年の作。二十一世紀の中葉には、金星が地球人の流刑地となり、外科手術は医療マシンが担当するようになっているそう。私は今2021年を生きているが、あと30年くらいでそんな世の中がやってくるのだろうか。現在、月へ行くことも難しく、火星(金星はいずれ人が住む環境にはない)への人類到達も実現できていない。なんか、ホックに怒られそう。こんなこともできていないのか!と。そんなホックの描いたSFミステリ。

この時代になるとアメリカはカナダと合衆国になり、コンピューター犯罪を取り締まるコンピューター検察局(CIB)が設立される。地球外防衛長官のデフォーが簡単な盲腸炎のはずなのに、手術マシンの暴走で死亡する事件が発生した。犯罪の原因は未来になってもあまり変わらないようだ。人間の持つ本質は変化しないということだろう。容疑者はたくさん。妻とのいざこざ、不倫問題、仕事上のライバル、金星の監獄から脱走した凶悪殺人者……。CIBの局長カール・クレイダーが中心になって事件の解決に向かって奔走する物語。

CIBの活躍については、続編として『コンピューター404の殺人』などがある。